
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究

第7回研究会（2022年度4回目）報告

日時：2022年12月10日

場所：AA研306とオンラインのハイブリッド開催

内容：今回は、パンデミック初期から中国本土や台湾の芸能の様子を情報収集してきた長嶺氏による、台湾の学校現場および年中行事に関する報告と、長年東北の民俗芸能を取材してきた阿部武司氏による、儀礼や世俗的な祭りにおける各種の民俗芸能の実践について発表が行われた。台湾はSARSの、また東北では東日本大震災の経験がある。こうした過去の災害・危機における芸能の在り方と、今回のCOVID-19のパンデミックにおけるその違いや共通点、また特に台湾ではそのSARSの経験が今回のCOVID-19における人々の対応にどのように影響を与えているのかといった観点からも議論がなされた。最後の全体討論では、トップダウン式のガイドラインが制定され、その範囲内で活動を行う台湾やシンガポールの事例と、現場の判断で方針を決めなければいけない日本の事例についての比較が話題になった。また、東北をはじめ「3年ぶり」ということで非常に祭りやイベントが盛り上がり、芸能実践も活性化するケースが昨今目立つが、この盛り上がりが継続してゆくのか、一過性のものなのか、今後を継続して調査してゆくことの重要性も確認された。

（以上文責 吉田ゆか子）

報告1

「コロナ下の台湾における防疫と芸能」

長嶺亮子

本発表は、コロナ状況下の台湾における防疫政策と芸能の様相を整理した。台湾のコロナの始まりから現在までは、その感染拡大と収束と安定を一まとまりとすると三つの期間に区切ることができるが、その状況に合わせ政府が詳細な防疫措置のガイドラインを示達し

ていること、芸能がそれに従いながら活動する様子を紹介した。また具体例として、2021年度から再開した全国学生音楽コンクールの防疫規定を取り上げ、ワクチン接種やコンクール当日の音出し不可などの防疫規定に対して賛否さまざまな意見を持ちながらコンクール開催と出場を維持しようと尽力する参加者の声も示した。発表後はコロナ状況下で開催されるコンクールと「ガイドライン」について議論が展開し、ガイドラインを制定する側やコンクールに参加「しない/できない」団体の声を拾う重要性や、台湾のコロナ禍と度々比較される SARS 蔓延期の芸能の状況を再検証する必要性などが、今後の研究課題として明確になった。

報告2

「コロナ禍の祭礼と民俗芸能～東北地方の現状～」

阿部武司

本発表では、コロナ禍における主に岩手県および東北地方の民俗芸能や祭りの3年間余りに及ぶ活動や実施の現状を映像記録の経験から行った。

2020年2月から首都圏中心に感染が拡大したが、政治判断で全国的な自粛が行われ東北地方においても2月下旬から軒並み民俗芸能の公演は中止になり、年中行事にも大きく制限がかかり、取りやめた地域も多く観られた。特に公共団体の開催予定だったホールなどの公演は主催者側が中止を決めたことで民俗芸能団体は断念を余儀なくされた場合が顕著であった。一方季節柄火防祭や春祈祷と言った集落を廻って獅子舞などが祈祷する年中行事は、民俗芸能団体は年中行事としての意義から行う構えで準備をしていましたが、集落の自治組織などの判断もあり、個別の訪問を取りやめたり、飲食の提供を取りやめたりした。また年中行事を自治体が観光行事として行っていた大掛かりな祭礼も3月時点で軒並み中止を宣言し始め、暗い影をいっきに落としていった。

民俗芸能団体の一部には、民俗芸能がどのような目的で行われてきたかを考え、病魔退散を願う行動を起こしていった。その行動が発端となって現在まで多くの民俗芸能が息を吹き返し、継承へと結びつけてきた。集うからこそ民俗芸能を楽しめるのだが、感染症と言う悪魔は、それを拒否し続けてきたが、3年ほどを経過して様々な工夫を凝らして行われた祭りや芸能公演でそれらの存在意義が確認できた。